金属のうす肉機械加工品

モーターパーツのエンドリング

ベアリングパーツ

いつの間にか“自分の会社”になっている

に出ずに草むしりをしていた。

運動は得意だった。水泳も体操も、市の大会の学校代表に選出された。

中学に進むと、部活動はバスケットボール、体操と、ともに2〜3ヵ月間だけ足を突っ込んでから、柔道部に。理由は、ガキ大将だった自分の、二番手に続く同級生が柔道部員だったから。「じゃ、オレが入ったら、いちばんだ」と思ったのだ。

ところがその柔道部は、3年生のワンマン部長が支配していた。おかげで誰もついてゆかず、ほかに先輩部員は2年生が2人だけ。だがどうしたわけか、この部長に山ちゃんは気に入られた。それで、地元の道場に通う同級生らを差し置き、5人の選手の1人に選ばれた。そして、これが高崎市大会で優勝！　2年次には群馬県大会で準優勝を果たした。

父が愛した旋盤

中学2年の終わりくらいからだったろうか、クラスの秀才と仲良くなった。彼は、効率的な学習方法を伝授してくれた。すると、通信簿に「1・2・3」しか並んでいなかった山ちゃんの成績がたちまち上位に。

卒業後の進路も、難関の国立群馬工業高等専門学校に定め、見事合格。高専を目指したのは、職人として働く父・鍋夫（なべお）さんの背中を見てきたからだった。

鍋夫さんは16歳で職に就いて以来、旋盤一筋。この仕事が好きで好きでたまらない人だった。独立してからは、自宅階下にある作業場で、早朝4時〜夜中の11時までずっと機械の前にいた。朝4時の始業は、近所の豆腐屋さんが仕込みを始めるのがその時間で、まあ、そろそろ周囲に迷惑もかからないだろうと見込んだからだ。本当なら、一日中だって旋盤にくっ付いていてもいい人だった。

そんな父が愛するモノづくりの仕事に、「いつか自分も就くんだろうな」と山ちゃんはぼんやり思っていた。

シンプルで実直な足取り

高専ではサッカー部に入部したものの、中学時代の山ちゃんの実績を聞きつけた先輩から熱心に勧誘され、柔道部に移籍。さて、どんな活躍を？　と訊いたら、「ぜんぜん」との応えが山ちゃんから返ってきた。

「なにしろ、飲むのが忙しくってね」

え？“飲む”ってお酒？　でも、高校生でしょ?!

「いや、高専て、5年制じゃないですか。だから、最上級生って、20歳になってるんですよね。で、なんとなく勧められて」

というわけで、高専での山ちゃんは、「もう、大学生みたいな生活をしてました。昔のことでね、先生も見て見ぬフリをしてくれてたし。飲むのを鍛えられたのが、この期間かな」

卒業後は、県外にあるベアリングの大手メーカーに、「社長になるぞ！」の勢いで就職。しかし、東京本社から時折ヘリコプターに乗ってやってくる実際の社長とのスケールの差に、「こりゃ、夢の実現には時間がかかりすぎる」と見当違いを知った山ちゃんだった。それにご両親の、「地元に戻そうとする」希望もあって、地元群馬の切削加工会社に家業の修行を兼ねて転職した。

2年後、山ちゃんは、昼間の勤めと、夜間の家業を掛け持ちする二重生活を余儀なくされていた。機械好きの鍋夫さんが、市内の同業者の間でも逸早くNC旋盤を導入。しかし、これを持て余してしまったのだ。仕方がない、山ちゃんが扱うしかなった。

ついに胆(はら)を括った山ちゃんは、鍋夫さん、母・よし江さん、職人さんの3人きりの山岸製作所に入社した。

すると、それまで汎用機のみで行っていた作業に、NC機が加わったことで作業効率が大幅にアップ。たちまち仕事の手が空いてしまった。

職人気質で旋盤に向かうのみの鍋夫さんに代わり、納品や客先との折衝はすべてよし江さんが行っていた。その役割を、今度は山ちゃんが担うようになったわけだが、さらに新規開拓の営業もしなければならなくなった。

山ちゃんはどんどん仕事を取って来た。それをNC機でさばく。増えてきた仕事に対応するため、2年後には新しいNC機を買った。それ以後も、ほぼ2年おきに機械を買い足していった。

「増えてきた仕事をそこで終わりにしないで、さらに新しい案件を増やしていったのがよかった。まあ、欲張りなんだよね」山ちゃんはそう言って笑うが、けっして“欲張り”などではない。むしろ、同社の歩みは、シンプルで実直である。

仕事が増え、機械が増え、従業員が増え、工場の規模が拡大してゆく。従業員は、15年前から地元の新卒の高校生を中心に採用するようになった。それが、専門学校生になり、短大生になり、大学生へと範囲が広がってゆく。

ヤマギシテクニカルセンター職業訓練校

経営が右肩上がりだった3年前、リーマンショックに襲われた。会社が窮地に瀕した時、人員削減の代わりに山ちゃんが行ったのは社員教育だった。1年ほど前から着手していたテクニカルマイスター制度を本格化したのだ。仕事を洗い出し、簡単な作業から難易度の高い技術へと順番に並べ、等級を付けて段階的に研修してゆく。2010年5月、モノづくり中小企業初である県認定の職業訓練校「ヤマギシテクニカルセンター」の開校だった。

ここで学ぶのは、技術面のテクニカルスキルのみではない。ヒューマンスキルも重視される。挨拶の仕方から始まり、傾聴の心を学ぶのだ。

「いくら仕事ができても、人間の意識が低いとね。社員が皆同じ方向を向いてないと、会社の力が充分に発揮できないでしょう。自分だけがいいんじゃなくて、持っている知識を新しい人に教えてあげるとかね」

定期的に外部から講師を招くことも含め、テクニカルスキル、ヒューマンスキルとも中堅社員と新入社員とに別れて研修する。

「みんな勉強したがっている。下の子たちが勉強しているので、既存組も技術的に追い越されるのではないかという危機感がありますから。ヒューマンスキルのほうはあんまり参加したがらないけど（笑）」

もちろんそれは山ちゃんの謙遜で、どの社員の方もとても礼儀正しい。

中小企業は、大企業と違って職場の移動もないし、競争意識も希薄で、和気あいあいになりがちだ。山ちゃんは、それを活性化させるため、新卒者の入社に合わせ、社員の部署移動を行う。山岸製作所は、現在大きく分けて次の3つの部門から成り立つ。新しい仕事を立ち上げる先行開発部門。量産ライン部門。多品種少量生産部門。誰もが、慣れた環境で作業をしたいのは人情だ。しかし、「ずっと同じ社員が居座り続ければ、そこにいる者の力が部門の力になってしまう。マンネリ化してしまうんですよ。ドブ川と一緒で、上側は澄んでいても、底をさらうと淀んでしまう」

毎春、新人が加わると職場内に変化ができる。それも新卒を採用する目的の1つだと山ちゃんは言う。

「まあ、たとえば5人の新卒を採用したら、5人分の売り上げを伸ばさなければならないわけなんですけどね。うちは、これまでそうやってきました」同社のシンプルで実直な足取りは今も変わらない。

そして研修を経たかつての新人たちは、といえば、「最初は返事もちゃんとしないような若い女子社員がね、不況の時は足にエアパッキン巻いて、暖房費を節約するんだって頑張ってくれたりね。みんなが自分から給料を下げてくれって言い出して、難局を一緒に乗り越えようって――いつの間にか“自分の会社”という意識を持つようになってくれてたんですね」

山ちゃんの夢は、山岸製作所を、山岸技研というレベルにまでさらに引き上げることだ。技術研究所に――「そのためにはずっと勉強し続けていかないと」山ちゃんの視線が彼方を向いた。

（取材・文＝上野（うえの） 歩（あゆむ））

Company Profile

エミダス会員番号：78113

◆会 社 名　株式会社山岸製作所
◆所 在 地　〒370-0081 群馬県高崎市浜川町 590-23
◆ TEL ／ FAX　TEL：027-360-4100㈹
FAX：027-344-5850
◆ E-mail　info@yamagishi-ss.com
◆創　　業　昭和 37 年
◆従業員数　90 名
◆事業内容
金属加工業　/　精密機械加工業
CNC 旋盤・マシニングセンター・複合加工機を用いての金属機械加工業

◆主要三品目
・ニードルベアリング保持器
・半導体製造装置部品
・エンドリング

◆注文・製品に関するお問合せ
担当：山岸良一　TEL：027-360-4100㈹